

ネ コ ナー ル



リ ナー ル

ネコメール

♪まいごのまいごのこねこちゃん～

やえさんは、勧められるままに手にした携帯電話からメロディが流れてくると、それを取り落としそうになりました。

「ほら、着信でございますよ。赤いボタンを押して下さい、はい」

眼鏡の奥の小さい目をパチパチしながら休みなく話していた中年の男性が、満面の笑みをうかべて指さしています。やえさんは、こわごわボタンを押しました。

おばあちゃん！ミーニで～す。

いつもかわいがってくれてありがとうございます。

これからだいすきなおばあちゃんと

メールでおはなしできるとおもうと、

ワクワクドキドキだにゃん。

よろしくだにゃん♡

画面いっぱい大きな文字が出ています。やえさんは、グリーン目をクリッとさせて見上げているネコのミーニを、まじまじと見つめました。

「どうです。届きましたでしょう。これでかわいいミーニちゃんの思っておられることが奥様にきちんと伝わるのです。いかがでございましょうか？当社のサービス、無料でございますので、はい」

ネクタイを反らしてしゃべり続けるその人の、丈夫そうな歯が並んだ口を、ぼかんと見ながら、やえさんは、さっきからのことを思い出してみました。

昼過ぎ、一人暮らしのやえさんの小さな玄関に、見知らぬ営業マンが立ちました。渡された大判の名刺には

『ニコネコ商会 営業部 根津田 柱』

と、印刷されていました。にこやかに携帯電話を勧める根津田さんに、やえさんは、

「もうこの歳ですから、とても使いこなせませんので」

そう言って強く断りました。でも、彼の言葉は流れるように続きました。

「この携帯は、当社が特許申請中の特別なものでございます。ネコちゃんが心の通じた飼い主さまだけに送ることができるメールなのでございます。ただ残念なことに、飼い主さまのメールは、ネコちゃんには届けられませんので、はい」

そう勢い込んで話しながら、アタッシュケースから出してきたのが、この白黒茶のネコ型の携帯でした。

「かわいい三毛ちゃんですら、こちらがよろしゅうございますね、はい」

根津田さんはそれに、ポケットからそっと出した粉をふりかけると、ミーニのそばに置きました。

「ミーニちゃん、いかがでしょうか？はい」

やえさんの後ろに隠れていたミーニは、一瞬背中を高くして

「フー」

と威嚇しましたが、その携帯に近づくと、しっぽを振って夢中でじゃれはじめました。

「お気に入っていただけただけでございますね。では、お試しにちょっとメールを、はい」

しばらくして届いたのが、このメールなのです。目の前の根津田さんは、書類を取り出して、話し続けています。

「会員登録させていただきました記念に、ニコネコ印のキャットフードネコ缶をサービスさせていただきます。ここにお名前とご印鑑を、はい」

そして、根津田さんは、もう元にもどらないのではないかと心配になるほど、顔をくちやくちやにして、なおしゃべり続けました。

「ありがとうございます。ではまたお伺いいたします。当社は、ネコちゃんの総合コンサルタントを自負いたしております。ミーニちゃんのことでお困りのことがございましたら、なんなりとご相談くださいませ。ミーニちゃんは、お行

儀のよいほんとかわいいネコちゃんでございますねえ、はい」

根津田さんは、きしむ戸を閉めてもまだ頭を下げて帰っていきました。

やえさんは、しばらく、はんことかんづめを持ったまま、ぼ~としていましたが、ひぎにのったミーニに、夕ごはんの催促をされて我に返りました。

「なんかきつねにつままれた気分だけれど、べつに損したわけじゃないからね」

そうミーニに話しながら、もらったネコ缶をお皿に入れてやりました。

夜、やえさんが夕食をとろうとしたとき、「まいごのまいごのこねこちゃん~」と、ニコネコ携帯が歌い始めました。やえさんは、慌ててボタンを押しました。

おばあちゃん、

いまたべたごはん

とってもおいしかったにゃん。

ミーニだいすきにゃん。

またたべたいにゃん

やえさんは、キッチンに入ってきたミーニの背中をなでながら言いました。

「すごいね。ミーニは、メールできるのね。これからなんでもおばあちゃんにお話ししてね」

次の日、根津田さんはまたやってきました。

「いかがでございますか？ミーニちゃんのごきげんは？えっ、あのネコ缶を気に入られた。さすがにグルメでございますねえ。よろしければ当社で販売もいたしておりますので、どうぞお買い上げ下さいませ。ドライフードカリカリもいかがでございますか？会員様は割引特典もございます、はい」

根津田さんは、ちょこまかと動き回りながら、車からネコ缶とカリカリの大箱を運びこみました。

「このおしゃれなストラップは、サービスでございます、はい」

そう言いながら、小さな赤い布の袋にポケットから出した粉を入れて携帯につけると、ミーニに笑顔をふりまきながら、帰っていきました。

ミーニは、その携帯ですずっと遊んでいます。心待ちにしているメールも日に二度くらい届きます。やえさんの心は、わくわくはずんで、背筋までのびた気がしてきました。

三日後、根津田さんはまたやってきました。

「おはようございます。ミーニちゃん、毛づやがよくなりましたねえ。お食事が合ったのでしょうかね。」

茶の間に正座した根津田さんは、なぜかぎくしゃくとして座りました

「せ、せっかくでございますので、ミーニちゃんのお、おくちを、ちょっと拝見しておきましょう、は、はい」

そう言ってミーニの口をのぞいて

「奥様、すこしミーニちゃんの歯に歯石が、はい。軽い歯周病にかかっておられますので、ご注意くださいませ。当社のおやつガムは食べるだけで歯を健康にいたします、はい。お買い上げありがとうございます。ポイントサービスもご利用ください、はい」

それからもやえさんは、根津田さんに勧められて目薬や爪切りやシャンプーなどを買いました。その都度ミーニからうれしいメールが届いたのです。

ひと月後にやってきた根津田さんは、ミーニの一才の誕生日プレゼントにと、小さなキャットハウスを持ってきてくれました。もちろんミーニは大喜び、やえさんもうれしくてたまりません。

「ミーニちゃん、ご機嫌でございますね。当社は食事、衛生用品だけでなく、ネコちゃんに楽しく暮らして頂けるようなおもちゃなども販売いたしております。カタログをご覧になって、よろしければご注文下さいませ。私が責任を持ってお届けいたしますので、はい」

やえさんは、ネコのための品物がこんなにもあるなんて考えてもみませんでした。キャットタワーやベッド、おもちゃなどを次々と注文しました。そのたびに、ミーニからありがとうのかわいいメールが送られてきました。

初めて根津田さんが現れてから、あっという間に一年が過ぎました。やえさんは、今は『ニコネコマンション』に住んでいます。高齢者がネコと一緒に暮らせるマンション。子供の時から住み慣れた家売り払って、引っ越してきました。色々考え迷っていた時、ミーニから

おばあちゃんと

マンションでくらせるの

うれしいにゃん。

きつとおともだちも

いっぱいいるにゃん。

こんなメールがきて決心したのです。

夕食を終えて、ソファーに座ったやえさんは、メールを待っていました。ここに移ってきてから、ミーニからのメールは一日一回だけになってしまいました。不思議なことに、このマンションに住む人は、みなネコ型携帯を持っています。そして、夜八時に、一斉に「まいごのまいごのこねこちゃん～」のメロディーが流れてくるのです。

その頃、以前やえさんが暮していた家では、たくさんの子ネズミが、ドタバタと追いかけてっこをしていました。その中に、小さな赤い袋で遊んでいる子たちがいます。

「これこれ、いたずらはほどほどにしてくださいね。これは、マタタビといって、お父さんがお仕事に使う大切なものなんですから、はい」

小さな目をパチパチさせたネズミが、笑いながら言いました。出っ張ったおなかがゆれて、丈夫そうな歯がのぞいていました。